ウグイスの里づくり（肝付町）

「蘭は幽山にありて自ら香る」

“ふる里の山の奥深く分け入ると、そこかしこに優美な白い花をつけ香ばしい匂いを放っている。その花を見るたびに、人知れず努力し内から光を放つ人間にならねば、と思ったものだ。この自作の句は終生心に刻む座右の銘でもあった。”二階堂さんの述懐である。

春３月のお彼岸の日、私は鹿児島県肝付町にある政治家二階堂翁の文化財指定の生家を訪ねた。雨上がりの民家は竹林に囲まれ、濡れた樹木は朝日に光っていた。そこで思いかけなくウグイスの歓迎を受けた。一羽ではない。前後左右で鳴くのである。ホーホケキョ。ホーホケキョ。おそらく１０羽はいただろう。まだ上手くはないが、透明な、空気をカミソリで切るようなシャープな声であった。深山幽谷にウグイス鳴く、こんな風情が今の日本のどこにあるだろうか！　驚きと嬉しさで胸が高鳴った。

ウグイス、といえば花鳥風月の最たるもの。ところが現在は、メジロもウグイスも飼育禁止なので、一般の方々からは、鳥の声を聞いて楽しむ、そんな風流の心まで失われてしまった。これでは日本人らしい感性も育たない。花鳥風月の心を取り戻すことは、日本人が日本人らしくあるためにとても肝要なことだ。

●　そこで提案

二階堂邸一帯の山のふもとで、ウグイスの鳴き声を愛でる聞く会を催す。もちろん籠の鳥ではなく野の鳥である。これを基本に、ふるさと起こしを進める。

第１ステージ

梅、桃、桜、そんな季節ごとの花を鑑賞しながら、お茶や焼酎を友として鳴き声を味わう会とする。どのウグイスが最高か、参加者が評点をつけて、全員投票で優勝の鳥を決めるなどして楽しむ。縄張りを持っているので、ある程度どの鳥かを特定できる。

第２ステージ

全国に散らばっている肝付町出身者を中心に「ふる里ウグイスの会」をつくり、彼らが「ウグイス大使」となって広報し、肝付町を全国のウグイス愛好家が集う町とする。
「今日、初音が聞かれました」といった「ウグイスの里便り」を発行することで、「ウグイスといえば肝属町、肝属町といえばウグイス」という評判を作り上げていく。

第３ステージ

最終段階では、私たちから失われた風流の心を取り戻し、ゆくゆくは、「美しいふる里」のモデルがここに創られ、波紋のように次々に輪が広がってあちこちに「日本のふる里」が再生されていく……。

結語

日本のふる里再生の出発を鳥の鳴き声から始めよう！　ちなみに、二階堂邸周辺は、高度経済成長以降に失われた日本らしさが残っている貴重な空間であり、肝付町を挙げて自然的風土を保存しつつ活用してほしいと願っている。